

☆年間第5主日(2月7日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (ヨブ記 7章 1-4、6-7 節)

この地上に生きる人間は兵役にあるようなもの。傭兵(ようへい)のように日々を送らなければならない。奴隷のように日の暮れるのを待ち焦がれ傭兵のように報酬を待ち望む。そうだ、わたしの嗣業(しぎょう)はむなく過ぎる月日。労苦の夜々が定められた報酬。横たわれればいつ起き上がれるのかと思い夜の長さ(う)み、いらだって夜明けを待つ。わたしの一生は機(はた)の梭(ひ)よりも速く望みもないままに過ぎ去る。忘れないでくださいわたしの命は風にすぎないことを。わたしの目は二度と幸いを見ないでしょう。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙 9章 16-23 節)

もともと、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強(し)いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

福音朗読（マルコによる福音書 1章 29－39節）

すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。

夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊(あくれい)に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。シモンとその仲間たちはイエスの後を追い、見つけると、「みんなが捜しています」と言った。イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

皆様お元気のことと思います。緊急事態宣言が延長されてしまいました。まだまだ収束できていませんので、致し方ないでしょうが、一刻も早く何の心配もなく外出したい気分ですね。そのためにはもう少し辛抱が必要なのでしょうね。先日の2月5日は日本二十六聖人の祝日でした。日本の教会にとって大事な祝日です。この殉教の血によって今の私たちの信仰があります。二十六人の中にはルドヴィコ茨城、トマス小崎、アントニオの三人の子どもが混じっていました。当時の人々の信仰教育によってこの三人は殉教することがどんなことなのかをよく知っていたのです。西坂の丘の処刑場で主である神の御許に行くことこそが自分たちの幸せであると信じていたのです。そして秀吉、徳川幕府がキリシタン禁令、伴天連追放令によってキリスト信者を根絶やしにしたと思ったその時、長崎の大浦天主堂に信仰を固く守り通した

信者たちが現れたのです。私たちはその信仰の子孫です。誇り高く信仰を表現しましょう。さて、今日の朗読に目を向けましょう。

第一朗読（ヨブ記 7章 1-4、6-7節）

ヨブ記は難解な書物と言われています。人間の幸せと不幸、喜びと悲しみ、人間の自由と神の試みなどが織りなした聖書なのです。苦しみが襲うと捨て鉢になったり、幸せが訪れると有頂天になったり。そんな中で私たち人間はどのように生きればいいのか問い直さなければならないのです。私たちのすべては神のみ手の中にあり、すべてのことを神に委ねて、神をたたえつつ生きることが美しく正しいとヨブは悟ります。ヨブは英語表記だと JOB となり、仕事を意味する job と同じつづりになります。何か意味がありそうですね。今は新型コロナウイルス感染症の苦しみの中にありますが、このような時こそ神に身をゆだね、すべきことに力を注ぐ時です。感染対策をしっかりとすること、感染した人のために祈ること、感染症対策に力を注いでいる人たちのために祈り、手を貸すことなのです。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙 9章 16-23節）

パウロは「福音を告げ知らせなければ、私は不幸なのです」と言っています。パウロの心の底からのことばでしょう。キリストに諭されてキリストのために働くパウロにとって、ほかのことなどいいのです。どうでもいいのです。できるだけ多くの人をキリストに出会わせることがパウロの宣教の目的、いや生きる目的なのです。そのためには何でもやる覚悟です。そして私たちはどうでしょうか。「STAY HOME」に乗じて、私たちは自分たちの仕事を放棄していないでしょうか。自分たちの仕事のためにはパウロに倣って、何でもやることです。今、飲食店の方々は店の中に来てもらうのは困難になったので、「TAKE OUT」を始めて店や自分たちの生活を守ろうと必死になっています。私たちも見習わなければなりません。祈ることをはじめ、様々な試み、コミュニケーションツールを通してより多くの人々にキリストを伝えましょう。

福音朗読（マルコによる福音書 1章 29－39節）

聖地のカファルナウムにはシモンとアンデレの家と言われる建物跡があります。会堂もすぐ近くにありますが、ですからこの付近は小さな村だったのでしょう。そこに大勢の人々がやってきたのです。ほとんどが歩いてきたのでしょう。それほど人々は癒しに始まる救いを待ち望んでいたのです。朝早くでもイエスの姿が見えなくなるとみんなで探し回っていました。「近くの町や村に行こう。そこでも私は宣教する。そのために私は来たのである」とイエスに言われたのです。休むことのないイエスの毎日だったのです。第二朗読で読まれたパウロの言葉が思い出されます。普段は福音と第二朗読は同じテーマを語ることはないのですが、今日は見事に一致しているようです。それも福音を語り（父なる神の心を語り）、キリストを伝えるという私たちの重大な使命が語られているのです。

PS

皆さん、教会の鐘の塔を最近見えますか。そこには四面の鐘の塔に四つの大きな時計があるのですが、長年動いていませんでした。今は動いています。それも相当正確に動いているのです。誤差は一日三十秒ぐらいです。直してくださっているのは、元育英高専（現サレジオ高専）の電気科の先生で小平教会の信者の依田勝先生です。もう一か月ぐらい寒い中を通してきてくださり、動くようにしてくださいました。先生は「神様が良い仕事を与えてくださった。まだまだ勉強しなさいということです。大変うれしいです。もっと正確に動くようにしたい」と仰っています。皆さん、良い人を使わしてくださった神様に感謝しましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光